

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

都市空間としての公園 (1) (私のスケッチ・ブック (6))

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2016-03-08 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 森, 明子 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/00005889

都市空間としての公園(1)

国立民族学博物館

森 明 子

◆公園とは？

ヨーロッパの都市の風景を構成するのは、教会、市庁舎、オペラハウスなどの大きな建物と、それを配置している広場や大通りなどの空間である。さらに、密集した都市の中に、広い面積で配置されている公園も見落とせない。公園は、ヨーロッパの町の風景を構成する重要な要素である。ヨーロッパに行ったことのある人は、日本の公園に比べて、ヨーロッパの公園が、広々として明るいのに感心した経験があるのではないだろうか。

たしかにヨーロッパには、美しい公園が多く見られる。なぜ、美しいかといえば、公園を利用している人たちはみな心地よさそうに見えるし、よく管理された公園という印象を受けるからである。しかも公園は、誰でも無料で利用することができる。観光旅行者である私たちも、拒まれることはなく、たいへん友好的である。

日本の都市の公園は、必ずしもつねに快適な空間ではない。無料の公園は、しばしば都市のふきだまりのような様相を示す。そこでは、ニュースになるものからならないものまで、さまざまな犯罪がおこっている。日本で快適な、つまり美しく安全な公園を求めるなら、それは有料であることが多い。入園料の必要な公園なら、きびしく管理されているからである。

では、児童公園と呼ばれる子どもの遊び場はどうだろう。「公園デビュー」ということばが生まれたことにみられるように、そこには大人の、ひじょうに緻密で緊張感に満ちた交際場が形成されている。「市民運動公園」なるものはどうだろう。この場合は、公園というより、スポーツ施設に特化している例が少なくない。では、なぜこれが運動公園と命名されるのだろうか。

こうしてみると、公園の大きさや公園が備えている施設は多様で、個々の公園の目的は、それぞれ異なっていることがわかる。ただし、本来の目的と実際の利用状況が、つねに一致しているわけでもない。また、公園のありようは、時代によっても変化する。そもそも、自分が「公園」に何を求めているのかさえ、曖昧であることに気がつく。私たちが公園に



図1 児童公園 (ベルリン)

求めるものは何だろう？

そこで、公園という特殊な空間を、都市の中に設けることを発明したヨーロッパにおいて、公園がそもそもどのように成立し、人々はそれをどのように利用しているのか、考えていきたい。今回はまず、都市公園の成立をみて、公園という空間のもつ政治性に注目しよう。なお、ここではベルリンとウィーンを参照枠としていることを、あらかじめお断りしておく。

◆都市公園の成立

現在、私たちがヨーロッパの都市を訪れて目にする公園は、その成立の経緯によって、いくつかに分けることができる。

- 1) 王侯や貴族の邸宅・離宮であったものが、後に市民に解放されたもの
- 2) 王侯の狩猟場が、後に市民に解放されたもの
- 3) 都市自治体によって建設された都市公園
- 4) 王侯や大学に帰属する研究施設が、市民に解放されたもの
- 5) 国際的なメッセ会場の跡地を、公園として利用するもの

ここで取り上げようとしているのは、3)にあげた、都市自治体によって建設されたものである。これが、公園のひとつの基本をなしていると考えられるし、また明治以降の日本が、ヨーロッパから取り入れようとしたものである。

ドイツの都市公園は、18世紀末ころの構想が、19世紀になって実現し、その後20世紀にかけて発展した。公園が19世紀に出現したということは、ドイツの公園を考えるうえで、決定的に重要な意味をもっている。19世紀、公共性の担い手は、君主の権力から、市民階級（ブルジョアジー）が中心となって構成する、自治体や国家の権力へと移行した。都市

公園は、この新しい公共性のひとつの姿を、都市の空間に具象化したものとしてとらえることができる。都市公園には、自治体や国家を実際に動かしている都市ブルジョアジーの文化が、投影される。そこで、公園に実現された都市ブルジョアジーの文化が、どのようなものであるのか、次の5点にまとめた。

◇散歩道

第1は、散歩道としての公園という側面である。散歩は、18世紀にブルジョアジーが発展させた文化である。ブルジョアジーの散歩は、気楽に好きなどを歩く暇つぶしではなかった。美しく着飾った身分の高い紳士淑女がそぞろ歩く目的は、散歩道で行う社交にある。したがって、散歩時の身なりや行動、誰が誰と散歩するのかなどは、適正とされるマナーに従うことが要求された。また、散歩する道はどこでもいいというわけではなく、散歩道として人々が認識する特定の道があった。そのような散歩道は、「公的な」性格を担っていたと考えてよい。18世紀のヨーロッパでは、すでに軍事的な意味を失っていた都市の市壁が、代表的な散歩道だった。

1853年、ハプスブルク帝国のフランツ・ヨーゼフ皇帝が、ウィーンで暴漢に襲われる事件があった。皇帝は、市壁の散歩道を歩いているときに、暴漢に襲われた。市壁の散歩道は、皇帝が散歩するような場所で、しかもそれを誰もが知っていたことを示している。この事件の後、ウィーン市壁は壊され、跡地には公園と散歩道を備えたリンク・シュトラークが建設された。

◇レストランと音楽堂

19世紀の公園には、いくつもの散歩道と同時に、レストランまたは音楽堂がつくられ、それが公園の核を構成した。レストランや音楽堂の建物は、公園にやってきたブルジョアジーの社交の中心的な舞台になった。この建

物の周囲に、花壇や噴水などをあしらった整形式の庭園がつくられ、その外側にさらに緑が広がる。建物から発した散歩道は、整形式の庭園を経て、緑地にいたる。

このような公園の基本的なデザインは、貴族の邸宅をモデルにしていることを、白幡洋三郎が指摘している。18世紀、貴族の間では、田舎に広大な邸宅をかまえ、そこに客を招いて社交を行うことが流行した。広い邸宅の中心に位置する城館では、さまざまな催しが行われた。19世紀のブルジョアジーは、貴族が田舎につくった邸宅をモデルとし、ただし都市の外には出ないで、都市空間の内部に彼らの社交の場をつくった。それが公園である。だから公園のデザインは、貴族の田舎の邸宅と重なる。田舎の城館にかわって、公園にはレストランや音楽堂がつくられ、その周囲には田舎の邸宅と同様に、整形式の庭園と遊歩道がつくられている。

さて、19世紀の社交の場では、馬車が必要だった。レストランや音楽堂に行くためだけでなく、広い公園内を馬車で社交することもあった。19世紀半ばに設計された公園に、散歩道の他に広い馬車道も見られるのは、そのためである。

◇社会階級

馬車は、当然のことながら、都市の下層の人々にとっては縁遠いものだった。19世紀の公園は、貴族社会から市民（ブルジョアジー）社会への移行を示しているが、それと同時に、この新興ブルジョアジー階級が、それよりも下層の都市の住民とは異なること、つまりブルジョアジーの威厳と勢力を、誇示する空間にもなった。そこで第3点として、公園が19世紀ブルジョアジーの階級意識を投影した装置であるということあげたい。この点を端的にあらわすのが、公園の名前である。たとえば、プレーメンにビュルガーパークと

いう公園がある。ビュルガーとは、ブルジョアジーにあたるドイツ語であり、文字通りブルジョアジーの公園を意味する。ウィーンにはブルクガルテン、フォルクスガルテン、シュタットパークという公園がある。それぞれ王宮庭園、民衆庭園、市民公園を意味し、その名前は、公園がそれぞれの社会階級に向けて設計されたことを示している。また、20世紀の前半になると、フォルクspark（民衆公園）ということばが使われるようになり、公園を誰のために、何を目的としてつくるかが、変化していくことになる。

◇民衆の啓蒙

ブルジョアジーのつくりあげた公園は、下層市民を締め出すものではなかった。19世紀の公園は、啓蒙主義の18世紀をへて、民衆を啓蒙しようとする意識を投影している。ここでは、教養あるブルジョアジーの社交の場を、下層階級が目にして、教養やマナーを学ぶ場にすることも重要な使命だと考えられた。こう考えたのは、もちろんブルジョアジー自身である。



図2 公園内のかつての馬車道（ツェレ）

啓蒙の装置としての公園には、もっと具体的な工夫もほどこされた。公園は、愛国心を育成する施設として考えられ、王族や軍人など、国家の意図を担い、国家に貢献した英雄や偉

人の造形が、公園を歩く人の視線の集まる要所要所に配置された。それは、貴族の邸宅において、ギリシア彫刻が配置されていた場所である。啓蒙主義の洗礼を受けたブルジョアジーは、民衆を排除することはせずに、民衆を国家に貢献する人間に教育しようとしたのである。

このように、国家に対する意識を民衆の間に育成しようとする意欲は、19世紀という近代国家統一の時代を考慮することによって、理解できる。ドイツで都市公園がつぎつぎにつくられていった19世紀中葉は、ビスマルクが出てドイツ国家を統一した時期と重なっている。

◇保健衛生

都市公園に実現された、ブルジョアジー文化の第5点としてあげたいのは、保健衛生施設としての側面である。公園は、労働者階級など都市の下層住民の啓蒙施設であると同時に、厚生施設としても考えられた。そのような考え方は、19世紀末から20世紀前半にかけて明確に意識され、実践されるようになる。端的な例として、ウィーンの民衆庭園(Volksgarten)に1924年に設置された、牛乳を飲むための施設(Milchtrinkhalle)をあげることができるだろう。ここでは、公園は民衆の栄養と健康に配慮している。

厚生施設としての公園のあり方については、20世紀の展開として、自然に対する意識とあわせて、改めて考える必要がある。

◆都市公園の政治性

公園は、誰もが利用できる開かれた空間であるが、その空間に、政治性がないと考えることは誤りである。19世紀につくられた公園には、当時、都市文化の担い手となったブルジョアジーの政治性が見え隠れしている。この公園文化は、たとえそのままではないにし

ても、現在私たちがヨーロッパに行ったときに目にする公園の基盤をなしていて、今ある公園に見て取ることができる。

政治性を担わなければ、このような公園が都市空間の中に実現することはありえなかった。公園は都市計画とともにあり、それは都市をおさめる側—自治体—の意図を必須とする。ブルジョアジーが下層の労働者を支配する構造をもつ自治体であるなら、公園は必然的に、ブルジョアジーが下層の労働者に与えるものになる。そうして、19世紀ヨーロッパの公園は実現した。

さて、今日の公園では、ブルジョアジーの威厳の誇示や民衆の啓蒙という特徴は、後景にしりぞいて、公園の利用のしかたはきわめて多様になっている。現代の公園のあり方は、20世紀から現代にいたる都市に住む人々が、前世紀から受継いだ公園に、新しい意味を与えた結果であり、それもまた積極的にとらえる価値がある。これについては、機会を改めて述べたいと思う。

□参考文献

- 1) Aubock, Maria and Gisa Ruland:Grun in Wien ; Ein Fuher zu den Garten, Parks und Landschaften der Stadt. Falter Verlag, Wien, 1994.
- 2) Goertz, Marina:Grune Oasen in Berlin ; Freizeit & Erholung in Parks und Garten. Nicolai, Berlin, 1999.
- 3) 白幡洋三郎：『近代都市公園史の研究』思文閣出版、1995

